

エンゲルベルト・ケンペルの「神道」研究とその背景

大島, 明秀
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://hdl.handle.net/2324/2881>

出版情報 : 九州史学. 142, pp.46-64, 2005-08-31. 九州史学研究会
バージョン :
権利関係 :

九州史学 第一四二号 抜刷
二〇〇五年八月三一日 発行

エンゲルベルト・ケンペルの「神道」研究とその背景

大島明秀

エンゲルベルト・ケンペルの「神道」研究とその背景

大島 明 秀

はじめに

The History of Japan (邦訳名「日本誌」)の著者として名高いケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) は、日欧に多大な影響を与えた重要人物である。日本においては、享和元年 (一八〇一) に元阿蘭陀稽古通詞であった志筑忠雄 (一七六〇〜一八〇六) によってオランダ語版「日本誌」の附録部分の一章が「鎖国論」という題名の下に抄訳され、その後幕末にかけて主に西洋人による日本讚美論として受容された。また、この時「鎖国」という言葉が翻訳語として造られた。一方、ケンペルの存在はヨーロッパにおいても非常に重要な位置を占める。カピツァが詳細に論じたように、ケンペルの死後刊行された「日本誌」は、出版以後一世紀以上に渡ってヨーロッパ人の日本観を規定する書物となった。^② 例えば日本開国前におけるヨーロッパでの「神道」に関する情報源は、百科全書派に見られるように「日本誌」を拠り所としていた。

本稿ではケンペルの「神道」研究について論じる。彼は元禄三年九月 (五年一〇月二六九〇〜九二) にかけて約二年間日本に滞在した。その期間に様々な情報源を確保し、ヨーロッパ帰郷後複数の情報源に基づいて社会・歴史・宗教・地理・鉱石・動物・植物などの項目を立てて *Heutiges Japan* (「日本誌」の元になった自筆原稿) という題名の下に執筆を開始し、その中の項目の一つとして日本の宗教について、特に一卷 (第三巻) を費しており、なかでも日本土着の宗教である「神道」に関しては、最も多くの紙幅を割いて詳細な記述を残している。

ケンペルについては長年に渡って日欧で研究が進められてきたが、一九九〇年にレムゴー (Lengoo) および東京で開催されたシンポジウムを契機に研究は進み、その頃不可能とされてきたケンペルの手稿の解読に成功するなど飛躍的に研究状況は進展した。その成果の一つとして挙げられるのは、「植物学」を通じて、ケンペルの背後には、バタヴィアにおけるネットワークが存在していたことを初めて明らかにし

たヴェルガー・クラインの研究である。この研究に代表されるように、とりわけケンペルの「植物学」的な側面については研究が進められた。

しかしながら、『日本誌』五巻中の一卷(第三巻)をなす日本宗教についての研究は、アストンの小論およびドーム版『日本誌』(ドーム版については後章三参照)に見られるそれを分析したアントニの二論文を除いては、現在まで取り組まれてこなかった。ケンペルの手稿資料を用いて「神道」記述を論じたものとなると皆無である。

本稿の課題は、ケンペルの手稿資料に基づいて、彼のバタヴィア・日本・ヨーロッパにおける情報源と背景を追究し、どのような理由からケンペルが日本宗教の中で「神道」を重視し、研究したのかを説明することである。

一 ケンペル以前のヨーロッパにおける日本宗教の研究状況および知識人ネットワークについて

ケンペルは「神道」(「神道」の一派としての「山伏」)の他にも「仏教」・「儒教」についても言及している。しかし、ケンペルが日本宗教の中で注目したのは「神道」だったのである。本章ではケンペルが日本の諸宗教の中で「仏教」・「儒教」ではなく「神道」の研究に目を向けた背景には、ヨーロッパにおける研究状況やアジアに精通したネットワークが、その背後に作用したであろうことを論じていく。

まずケンペル以前に来日したヨーロッパ人の「神道」研究について

述べる。宗教に関する記述を残した人物としては、イエズス会士をはじめとする宣教師やオランダ商人などが候補に挙げられるが、その中で大きな記述を残したのは主にイエズス会士である。

イエズス会士による「神道」についての記述は、書簡、年報、フロイス『日本史』⁷⁾およびロドリゲス『日本教会史』⁸⁾に見られるものがその主要なものであるが、彼らの記述方法は、現在の研究論文のように項目を分類し章立てして論じるというのではなく、物語風の文体であり、その中にわずかに「神道」に関連した記事が断片的に残されているにすぎない。そしてそれらの記事には複数の資料を参照、比較するといった姿勢や、体系的な、あるいは詳細な「神道」の究明を目指した研究は見られない。さらにイエズス会が日本人協力者を得て編集した三二、七九八語からなる『長崎版日葡辞書』⁹⁾では、「神道」語彙は「仏教」語彙に比べて分量が圧倒的に少なく、また宗派や哲学的な内容に関する用語も見られない。¹⁰⁾つまり、神学的なレヴェルがあまり高くなかったことや組織力の弱さから、「神道」を対抗勢力として重視し研究する姿勢はなかったといえよう。

他方、「仏教」に関しては、ザビエルの来日以降、イエズス会士達によって研究が積み重ねられていた。ガゴ (Balthasar Gago, 1515?-1583)・トルレス (Cosme de Torres, 1510-1570)・カブラル (Francisco Cabral, 1528-1609)・フェルナンデス (João Fernandez, 1525-1567)・アルメイダ (Luis de Almeida, 1525-1583)・オルガンティノ (Gnecchi-Soldi Organitino, 1530-1609)・ヴァリニャーノ (Alexandro

Valignano, 1539-1606)・フロイスなどの宣教師が記した書簡・年報・冊子などに「仏教」に関する言及は数多く見受けられる。前述したように「長崎版日葡辞書」に見られる「仏教」語彙の分量は「神道」語彙に比べ遙かに多く、加えてその収録範囲は「解脱」^①や「本覚」^②といった哲学的性質を持つ語彙にまで及ぶ。また、その語彙が一般的な「仏教」語彙でない場合、どの宗派によって使用されている語彙かといったことまで記されている。三章で述べるように、手稿「今日の日本」執筆時にケンペルが保有していた資料は「神道」に関するものが多く、「仏教」に関する資料は乏しかった。帰郷後ケンペルがイエズス会士の書簡や著作などを読んで、研究状況を認識していたことは十分に考えられる。数十年間重ねられてきた綿密なイエズス会士の「仏教」研究に対して、ケンペルの手持ちの乏しい「仏教」資料および経験では、学問的に新たな貢献をすることは困難であった。

「儒教」に関しても、やはりイエズス会士の研究は進んでいた。但し、日本では「儒教」の倫理的側面が幕府の民間統治の方針に盛り込まれはしたものの、宗教としては勢力を誇りなかつた。イエズス会士による儒教研究の舞台は儒教が繁栄していた中国であった。イエズス会士は、日本において対抗勢力であった「仏教」を綿密に研究したように、中国においてもまた、中国哲学の根源に在るものとして「易」や「儒教」を徹底的に研究した。^③例えば、ロンゴバルディ(Nicolas Longobardi, 1559-1654)やイントルチェッタ(Prosper Inorçetta, 1625-1696)などに見られるように、中国哲学の解釈として様々な見解が唱えられ、神性

の有無についての様々な立場などから論争が巻き起こるが、結果として「儒教」は宗教というよりは、哲学であるとの見解が示されていく。^④中国の「儒教」研究書として、成立年代が早いものとしては、ロンゴバルディの *Traité sur quelques points de la Religion des Chinois* (＝「中国人の宗教の諸問題点について」)が挙げられる。本書は序文から推定して一六二三年頃にラテン語で書かれたと考えられる。中国人が信仰する宗教として、「儒教」の他に「仏教」・「道教」に関する言及も見られる。^⑤しかしながら、ラテン語の原著は刊行されず、本書がフランス語に翻訳、出版されるのは、ずっと遅く一七〇一年のことであった。^⑥それでもこの時期は、ケンペルが「今日の日本」の執筆を開始する前後であった。

また、一六六二年にイントルチェッタおよびダ・コスタ(Inacio da Costa, 1599-1666)によって、「大学」と「論語」が *Sapientia Sinica* (＝「中国の智慧」)という題名で、ラテン語に翻訳、出版された。^⑦次いで「中庸」も一六六七年、六九年と二度に分けて *Sinarum Scientia politico-moralis* (＝「中国の政治・倫理的学問科学」)という題名で刊行された。^⑧これらは、一六八七年にパリで刊行された *Confucius Sinarum Philosophus* (＝「中国の哲学者孔子」)の一節に収められ、二書は合わせてこれもまた「中国の智慧」と呼ばれた。^⑨ケンペルの甥ヨハン・ヘルマン(Johann Hermann Kaempfer, 1691-1736)の書簡からケンペルが「中国の智慧」を所有していたことが窺い知れる。^⑩一七世紀後半に刊行された「中国の智慧」はヨーロッパにおける初めての本格

的な「儒教」研究書であり、フランス革命期までの東洋哲学観を決定付けた²⁸。というのは、フランス革命頃までヨーロッパの「儒教」観は、この著作に対する賛否によって規定されたからである²⁹。ヨーロッパにおいてこのように「儒教」研究は進められていた。

次にネットワークについて述べる。ケンペルは来日前の一六八九年一〇月―九〇年五月にかけてバタヴィアに滞在した。当時そこにはカンプハイス (Jo(h)annes Camphuis, 1634-1695) をはじめとする日本を往来しているオランダ商人や、学問に興味のある教育水準の高いヨーロッパ人達と、トユルプ (Nicolaas Tulp, 1593-1674) などオランダの知識人との間にネットワークがあり、文通などのやりとりをしていた。ケンペルもこのネットワークに関わっており、日本で活動するにあたってこのネットワークが大きな作用を及ぼしていた³⁰。というのは、そのメンバーの一人ヤーヘル (Herbert de Jager, 1636-1694) が、ケンペルに覚え書を与えていたのである³¹。そこには「地理」・「植物」をはじめとして様々な項目が記載されており、例えば「新改江戸鑑 全」³²との記述が認められるが、実際にケンペルは「江戸武鑑」を持って帰った³³。この行動から分かるように、ケンペルはこの覚え書に従って活動する予定であった³⁴。その項目の一つとして「宗教」に関するものもあり、「日本拜佛」³⁵や「日本暦日」³⁶なる記事が確認できる。もともとケンペルには日本宗教の知識はなかったが、この覚え書によって日本で出版されている宗教書を手に入る姿勢と知見を得た。この時「宗教」が研究に価する分野だとの認識をも獲得したと考えられる。

ケンペルはレムゴーに戻ってから『今日の日本』の執筆を開始した。執筆時に「中国の智慧」を所有していたことから、ヨーロッパにおける「儒教」研究の具合を十分に把握していた。「仏教」の場合と同様に、ケンペルの乏しい「儒教」資料および経験では、「儒教」について新たな成果を出し、大きな学問的貢献をすることは難しかった。つまり資料的な具合とヨーロッパにおける研究状況から見て、『今日の日本』執筆時には、ケンペルが「仏教」・「儒教」について、もはやヨーロッパの学界に貢献するのは困難であり、一方「神道」は未開拓の領域であり、貢献の余地が多分にあった。ケンペルは「神道」が日本土着の宗教であるとの認識をもって重視するのであるが、「神道」研究に力注いだ背後には、所有資料の具合とヨーロッパの研究状況が存在していたのである。

二 手稿『今日の日本』第三巻の構成について

本章では手稿『今日の日本』における第三巻「日本の諸宗教について」の記述構成から、ケンペルの「神道」重視について論じる。

手稿『今日の日本』におけるケンペルの記述形式は、まず項目を立てて、そしてそれぞれの項目について複数の情報源を比較検討した上で記述を構成するという方法を採用している。日本を研究対象とし、諸資料や情報源を比較考察して項目を立てて論じる記述スタイルは、ヨーロッパ人としては、ヴァレニウス (Bernhardus Varenius, 1622-1650)

が嚆矢であると考えられる。ケンペルがヴァレニウスを参照していたかどうかは定かではないが、いずれにしてもケンペルはこのような記述方針の下に、対象としての日本を論じたのである。

手稿『今日の日本』は五巻構成から成り、宗教を論じた部分は次の二つに分けられる。(一) シヤムにおける宗教の記述 (二) 日本における諸宗教の記述、であるが、本稿では“De Statu Religionis Japonicae. Daß ist von dem Heydenhumb oder Gözen dienste der Japaner” (＝日本の宗教の状況について、すなわち異教徒、換言すれば日本人の偶像崇拜について) と題された第三巻に焦点を絞って論じていく。

第三巻は七章から成る。日本の諸宗教について、「神道」を主としながら「山伏」・「仏教」・「儒教」についてそれぞれ記述を残している。これらを表にまとめると表一の通りである。この表から次のことがいえる。日本における諸宗教についての記述の順番は、1 「神道」 2 「仏教」 3 「儒教」である。諸宗教の日本における古さ、つまり宗教が日本に根付いた順番に記載したのである。これはケンペルの残した記述からも裏付けられる。また、「仏教」および「儒教」に関する記述は一章のみであるが、「神道」に関する記述については記述項目を五種類に分類して(ケンペルは「山伏」を「神道」の一派と見ている) いることから、「神道」重視の姿勢が外観的に読みとれる。

表一 『今日の日本』第三巻の章立て

宗教の種類	Caput (Capitel) (章)	頁数
神道	第一章 日本の諸宗教、特に神道という宗教について (1: Von den Religionen dieses Reichs, und besonders von der Sintoschen Religion)	3頁
神道	第二章 神道の寺院、信仰および諸礼拝について (2: Von den Sintoschen Tempeln Glauben und Götter-Dienste)	6頁
神道	第三章 神道の礼日、すなわち幸日と聖日及び祭礼について (3: Von den Sintoschen Rebi, das ist glück und heiligen tagen, und ihrer feyer)	7頁
神道	第四章 参宮、すなわち伊勢への巡拝について (4: Von Sanga oder beifahrt nach Jsje)	5頁
山伏 (神道)	第五章 山伏、すなわち山の僧侶達およびその他の宗教者達について (5: Von denen Jammabos oder Berg Pfaffen und andern devotiis)	4頁
仏教	第六章 仏道、すなわち外来異教とその開祖全般について (6: Von der Budsdo oder Außländischem Heydentum und dessen Urtreiber insgemein)	6頁
儒教	第七章 儒道、すなわち道德家達あるいは哲學家達の教え、または道について (7: Von der Sjuio, das ist Lehre oder Wege der Moralisten oder Philosophen)	3頁

三 大英図書館蔵ケンペル・コレクションの「神道」資料について

ケンペルは「神道」をはじめとする日本の宗教についての記述をするにあたって、どのような資料を確保していたのであろうか。ケンペルが保有していた資料には (I) 物による情報 (II) 口頭による人的

情報が考えられ、さらに細かく分類すると、前者は(Ⅰ)―1日本の書籍(Ⅰ)―2器物(Ⅰ)―3ヨーロッパで買ったもの(Ⅰ)―4メモ類、後者は(Ⅱ) 人的な情報源、という合わせて五種類の情報源が挙げられる。

まず前者であるが、現在大英図書館に所蔵されているケンペルが日本から持ち帰った四二部の書籍を、ブラウンはその内容から九種に分類している。^⑧ ①道中記のような旅行案内書②日本全国および主要都市の絵図③いろは、千字文などの習字本④暦、「家内重宝記」などの日常生活の便覧⑤「訓蒙図彙」および「図解本草」の図典⑥武鑑および武家法度の資料⑦年代記⑧戦記、物語、和歌などの文学書⑨謡本や浄瑠璃の正本である。この分類を参考にして整理すると表二のようになる。^⑨

表に見られる資料以外で、現存を見ないが、ケンペルが参照したと考えられる書籍としては「節用集」・「神代紀」^⑩が挙げられる。また、ヨーロッパ帰郷後、ケンペル以前に来日した宣教師達の書簡・年報を見ていたであろうことと、「中国の智恵」を所有していたことは前述した。器物としては和紙、秤、木瓜形返子入千手観音などが現存している。これらの中で宗教に関する資料、すなわち次の五つ(1)神道、暦類(神道系)(2)仏教(3)儒教(4)辞書類のいずれかに当てはまる資料は表三のようになる。

【今日の日本】執筆時にケンペルが保有・参照した日本の宗教に関する資料は表三のような具合であった。辞書類の他は「神道」に関する書籍が圧倒的に多い。これには三つの理由が考えられる。まずケンペル

表二 大英図書館所蔵ケンペル保有資料(書籍)

分類	書籍名	計
①	「江戸道中記」2部・「今極道中付」・「今極道中鑑」・「西国三十三番順礼歌安見絵図」・「西国三十三所順礼えん起」・「諸国海陸安見絵図」・「江戸御大絵図」・「諸国安見回文之絵図」・「新選大日本図鑑」・「本朝図鑑綱目」・「増補江戸図」・「増補大坂図」・「日本国大絵図」・「新版日本国大絵図」・「長崎絵図」・「新選増補京大絵図」	17部
②	「七いろは」2部・「増益以呂波雑韻」・「書引千字文」	4部
③	「伊勢暦」・「大ざっしよ」・「家内重宝記」	3部
④	「図解本草」・「訓蒙図彙」	2部
⑤	「江戸武鑑」・「太平武鑑大全」・「御成敗式目」	3部
⑥	「大日本王代記」・「倭漢年表録」・「大日本国年号図」	3部
⑦	「大坂物語」・「嶋原記」・「平家物語」・「太平記」・「しのだづまつりぎつね并あべノ清明出生物語」・「頭書絵抄百人一首」・他浄瑠璃本や謡本等4部 ^⑪	10部

表三 宗教関連資料(書籍・器物)

分類	書籍名	計
(1)	「大日本王代記」 ^⑫ ・「倭漢年表録」 ^⑬ ・「大日本国年号図」 ^⑭ ・「神代紀」・「大ざっしよ」・「伊勢暦」	6部
(2)	「木瓜形返子入千手観音」	1体
(3)	<i>Sapientia Sinica</i>	1部
(4)	「七いろは」2部・「増益以呂波雑韻」・「書引千字文」・「節用集」	5部

ルの日本という国の独自性に対する認識・興味を持つ姿勢である。つまり日本の独自のものを欲したということである。次に経済的状況が推察される。ケンペルは医者であり、医者は当時あまり身分の高い職業ではなく、また、助手であった今村源右衛門(一六七一一一七三六)は、身分がまだ部屋小使いであり給料を得ていなかった。つまり経済的な問題からありふれた安価なものしか購入できなかった。最後に、出島外で購入したものを、出島のケンペルのもとへ届けるという作業は、大っぴらにできることではなく、つまりは入手しやすく、さらにあまり大きいものであつてはならなかつたことが考えられる。

次に人的な情報源についてであるが、出島阿蘭陀商館長を勤めたバイテンヘム(Hendrik van Buijtenhem)、バタヴィアに日本様式の家を所有していた日本通のカンブハイス、ケンペルと親交のあつたヤーヘルなどが挙げられる。^{①7}

日本側においてはまず助手であつた今村源右衛門、そして元禄六年(一六九三)に年番小通詞、同十年(一六九七)には年番大通詞を勤めている名村権八(？一七二五)、山伏の情報を提供した楢林鎮山^{①8}、貞享四年(一六八七)に年番大通詞を勤めている横山与三右衛門(一六二一一一六九七)などが挙げられる。また、ドーム版「日本誌」にも情報が見られる。ドーム版はケンペルの甥のヨハン・ヘルマンの原稿を底本としているらしいが、残念なことに甥の原稿は、現在失われておりその存在を見ない。しかしながら、甥の原稿が確かに存在してドームがそれに基づいていたことは、ミヒエルによって証明された。^{①9}ド

ーム版の第三巻第一章の最後に、「混沌」(Konon)、「氣」(Ki)についての記述があり、これは手稿「今日の日本」には見られない。これらの形而上的概念は或る乙名(ein Onna)によって説明されたと述べられており、その或る乙名とは当時の出島乙名吉川儀部右衛門のことであり、彼も情報源の一人であつた。^{②0}

ケンペルのメモ類にも「神道」に関する記述が多く認められる。「日本の暦」や「神おろし」といった一群の記述(後章四章2節および四章3節を参照。)や、Juno(＝神道)と題されたノート七頁分の記載が見られる。^{②1}その他メモ類のあちこちに「神道」に関するまとまつた記述がある。このように「今日の日本」執筆時にケンペルが所有していた日本の諸宗教に関する資料として、「神道」資料は特に充実していたのである。

四 ケンペル資料に見られる日本民族の歴史的位置付けにおける「神道」の役割について

ケンペルは日本の諸宗教の中で、なぜ「神道」を最も評価し、大幅に紙幅を費やして記述したのであろうか。本章ではこれまでの考察をふまえた上で、ケンペルが「神道」を重視した理由について論じていく。

ケンペルが「神道」を重点的に扱った理由としては次の三つが考えられる。最初に、ケンペルには各地域の文化の独自性を重視する姿勢・

意識、すなわち「土着」のものを重視する意識があったことである。次に、既に論じたように「神道」に関する資料が他の宗教資料に比べ充実していたことが挙げられる。最後に、ヨーロッパにおいて、「今日の日本」執筆時には「儒教」や「仏教」は既に研究され、ケンペルが新たに大きな研究成果をあげることが困難であったが、「神道」研究については先駆的な研究であり貢献しやすかったことである。

では、「土着」のものに対する重視の姿勢、言い換えれば日本「固有」のものに対する重視の傾向はどのあたりに見られるのであろうか。ケンペルは日本人の起源について特に二章を費して論じている。⁵³ それまでのヨーロッパ人が日本人の起源を中国(人)と考えていたのに対し、ケンペルは日本人の起源について地理学的・言語学的考察から独自の説を提唱し、さらに日本人自身が考える日本の起源について一章を割いている。これは日本「固有」のものを重視した態度だといえる。また、ケンペルはイエズス会が作成した中国の暦を意識して、日本の暦を作成した。つまりこの二つは世界における日本の位置付けを示した論述である。ケンペルは日本がバビロンに直接由来する古い民族であり、独自の古い文化を持つ民族であるとの自身の見解の根拠として、日本の本来的な宗教である「神道」を用いた。そのため「神道」重視の姿勢を採ったのである。次に、ケンペル以前のヨーロッパ人が特に注意を払わなかった「伊勢参宮」・「山伏」に特に一章を費して記述していることから、「神道」を深く研究しようとする姿勢が見受けられる。そして手稿に「神道」に関する多数のメモが残されている。この

資料群に、特に神名帳として使用されたと思われる「日本神下し」と題された、神名が列挙された一連の写しとメモがある。この記述は「今日の日本」にも使用されている。「仏教」・「儒教」関連資料でこのようにまとまった写しは見られない。以下、「日本の起源」「暦」「日本神下し」についてそれぞれ述べる。(「伊勢参宮」・「山伏」に特に一章を費して記述していることについては省略。)

1 日本の起源について

ケンペルは「今日の日本」において、日本人の起源について第一巻の第五章“Von dem Ursprung der Einwohner”⁵⁴ (日本人の起源について)および第六章“Von der Japaner Ursprung nach Ihrer eigenen Föbulensen Meinung”⁵⁵ (日本人の寓話的伝説による日本人の起源について)の二章を割いて論じている。

第五章ではヨーロッパ人であるケンペルが様々な考察を加えながら日本人の起源について詳細に論じている。ここでは新しい「知」の領域を探ろうとするケンペルの意思が見える。また、第六章では日本人が自分で考える、つまり「土着」の伝説的な起源を記録している。ここに学問的「知」の探究と同時に異文化の「固有」のものを重視する念が窺えるのである。

ケンペルは第五章の冒頭で、それまでのヨーロッパ人の日本人の起源に対する研究態度とは一線を画し「我々の国では記述者はこのような見解を持っていて、それが主流である…すなわち日本人は中国人に

由来する」と、研究の現状の問題を提起する。当時のヨーロッパ人の考える日本人の起源は中国から生じたもの、つまり日本人の祖先は中国人であると見なしていたのである（ケンペルが言うところの、ヨーロッパで主流であった日本人の中国起源説については後述）。その例は日本通であったロドリゲスにも見られる。ロドリゲスは一五七七年に初めて日本にやって来て、八年間豊後に滞在し、この地でイエズス会に入り、一五八一年に豊後で創設されたコレジオで始めて本格的な教育を受けることとなった。彼は人並みはずれた才能で日本語を習得し、一五八八年には日本語での説教ができる程に上達し、その後も通事として秀吉や家康との外交折衝にも参与する程になった人物である。このように日本に精通していたロドリゲスの日本の起源についての記述は、『日本教会史』の第一巻第三章「日本の歴史の古さについて、日本人は如何なる民族であるか」に見られる。「日本人の起源は複雑であるが、初期の人によって最初の起源について書かれたのは、中国の文字や占星術やインディアの偶像教の諸宗派なりが入ってから後のことである。また、最初の移住者がイザナギ・イザナミであった、と日本の初期の歴史記述者は書いている」などと述べられているものの、ロドリゲスの見解は「正にシナの占星術の予言に従って宇宙の創造を理由づけようとしたのである」という記述に集約されている。このように日本に精通した人物が記載したものでさえも、およそ日本固有の起源に関する記述と言うよりは、「中国の一部としての日本」という観点に基づいて述べられるのが典型であった。

その他ヴィレラの記述にも日本の起源についての記事が見られる。インドの修道士達に宛てて堺から発信された一五六三年四月二十七日付けの書簡である。以下その書簡の抜粋である。

「この世の始まりに関する都の人々の諸説

第一の説は、彼らの言うところによれば、この世は初め、丸い卵であり、激しく荒れ狂う風がこの卵に衝突してこれを破壊したところ、その白身から天が、また黄身と殻から海と陸が生じ、以後、創造物が現れて今日のように繁殖してきた、というものである。第二は、この世の始まりは無であり、何の助けもなく、ただ自然の力により我々が今日にしているものが生じたとの説である。第三は日本人の思慮深さより生ずる独特な説で、この世は初め、全体が一つの湖で、陸もなく人もいかなかったが、イザナミ（Yanamin. F. Izanami）と称する人が天より三又の鉤を投げ、天の下に川があるやも知れぬと言って水中でこれをかき回し、水の下にあった一滴の泥を引き揚げ、これが三又に付着して水の上に現れた時、一つの島となり、やがてこれより日本国が誕生した、という説である。それ故、彼らはイザナミと称する人とその妻のイザナギ（Yanangu. F. Yzangu）が日本の創始者であり、すべての日本人はこれに由来すると考えている」

ヴィレラの日本固有の起源を記録した姿勢は評価できるが、書簡中の断片的な記述にすぎない。ヴィレラ自身の考察はなく、複数の資料を参照して構成された研究とはとてもいえないものである。しかし、ケンペル以前に書かれた日本の起源に関する記述としては、最もまと

まったものである。

ケンペルの日本の起源に関する記述は、前述したように二章に渡って論じられている。第五章はケンペル独自の説であり、第六章は日本人自身が考える説である。第五章において、ヨーロッパでは、記述者は、日本人は中国人に由来するという見解を持っていて、その考えが主流であると述べている。この説には二つがあり、一つはリンスホーテン (Jan Huyghen van Linschoten, 1563-1611) の著書に見られる島流し説で、内容は単なる伝説・作り話であるとし、もう一つは秦の始皇帝の念願から、或る医者が不老不死の薬を作るために日本にしかない薬草を取ってくるという名目で、三〇〇人の少年少女を引き連れて実は日本に逃げて来たという説である。

ケンペルは、この日本の起源は中国であるという説に複数の証拠から反論を試みている。まず言語学的な見地からの反証である。「言語とその特性が、その民族の起源とその民族の大昔の繋がりを調べる最も確かな行為であることに、議論の余地はない。歴史的な種々の諸民族において、そのような方法で、その根源にまで溯って調べれば、判断できるであろう」と唱え、さらに「同じように世界のその他の場所の諸民族の混合もまた、言語から立証できるであろう」と、言語と民族の特性を考察することによる起源追求方法を提起する。ところで日本語は、単語や特徴全体をスペイン流の厳格な調査法で考察すれば、日本の国の由来を推測させるような隣接諸国との言語上の混合や類似性について、独立して純粋なものであることが分かるだろう」と述べ、

それから日本人が中国の書籍を読む時に、文意を解し易くするために、語順を入れ替えたり、日本人の発声と中国人の発声とが異なることを、両者の発する「H」「R」「D」の音で例証し、さらに「誤って考えられている日本の起源に対してもまた、日本語の特殊性と構造が、中国語におけるそれとは全く仕組みが別であることをもって立ち向かう」と喝破し、言語学的に日本の起源が中国であることを完全に否定する。

次に日本と中国の宗教の相違をもつて反証の材料とする。ここで「神道」は中国においては勿論、世界の他のどの民族にも知られていないということが述べられている。そして、古代の文字、文書などの相違、また、生活習慣の相違を更なる証拠として引き合いに出し、日本人の起源は中国にあるのではなく、直接バビロンに由来しているのだという結論が引き出されている。

続けてケンペルは、日本人は固有の民族であるという見解をさらに裏付けるために、バビロンから日本に至る道のりを、多くの地名と地図などから得た地理学的な知識を踏まえて詳細に考証する。この考証は長いので以下要約すると、ケンペルは、飲料水や食糧源の問題から海、河やカスピ海あるいは黒海の近くのルートを通ったであろうこと、さらに荒れ果てて道もないマハリン山脈 (Maharische gebirge) や砂漠地のシストウーン (Sisun) は避けたであろうと推測し、二人の鞆靴人旅行者からもらった旅行の資料に基づいて、カスピ海の北東岸に位置する半島マンギシュラーク (Mien Kischlaag) から中国までの間の、

一つの地域から次の地域までに要する日程（全部で一二地域、九〇日）について詳細に考慮する。そしてこれらの考察から高麗まで日本人が辿った道のりを説明するのである。次に、高麗からは舟で長門に渡ったのだろうと推測する。これには他にもう一つの説として東韃靼から蝦夷を通ってやって来たのだという説も存在するとし、それに対しても否定の立場をとってはいない。そしてケンペルの解釈によれば、どちらのルートにしても日本人の祖先は伊勢を居住地として選んだのであり、日本人が伊勢を自分の先祖の定住地であると信じ、毎年伊勢参りをすることから、自身の説が裏付けられていると述べる。さらに、伊勢に日本人が定住した後についても論を進め、日本に外国人があまり存在しない理由や、鬼および小人島にも言及し、考察を行う。そして日本人の中でも地域によって体格などが著しく異なっていること、理由として、例を挙げて日本人には基幹民族があつて、そこに枝葉の異人種が混ざつていったのであろうと指摘する。^⑩

ケンペルは「日本人の根源及び起源を訪ねると、日本人は中国人とは由来を異にする独自の民族と考えられる」と、これまでの考察の総まとめをし、結論づける。

ケンペルの思考の根底には、確かに旧約聖書の世界観が基盤として厳然と存在しているのであるが、しかしながら複数の資料を用いて、言語学的・地理学的考察を行った上で、バビロンから日本に至るルートを導きだし、日本民族は直接バビロンに由来する古い民族であるとその固有性を述べ、日本の起源を中国とは分離して考えるべきとの理

論を裏付け、結論づけるのである。これはケンペル以前のヨーロッパ人には見られない研究姿勢であり取り組みでもある。ケンペルは初めて日本の起源を言語学的・地理学的に考察し、そして世界における日本の位置付けを行った学者なのである。

次に第六章であるが、その冒頭でケンペルは「日本人は中国人あるいは他のよその民族の血脈であるという見解を屈辱的なものとして捉えており、（日本を）自身の小世界に芽生えたものであると考えている」と、ある文化には独自の（日本には日本の）考えが存在するという見解を唱える。そして日本人自身が考える起源について、日本人が唱える神々の時代は二つあり、一つ目は天の（神に由来する）「氣」の、すなわち肉体のない神の代であり、理解できない程長い年月に渡つてこの国の長であつた時代、もう一つは一連のこの世の「氣」、すなわち人間神の時代と同じく日本国がかなりの年月に渡つて治められていた時代である。そしてケンペルは天神七代について、地神五代について、加えて人皇（神武天皇）に至る過程の説明を記す。その後「これまで、日本の国の起源について日本人の伝統は貴重に神聖に保持されてきた。これはどのような国についても同じ事が言え、自身に健全な理解が書き留められ、そして再考することは予期されないものである」という日本人自身が考える起源について否定的ではない意見が唱えられている。また、「エジプト人・カルデア人・インド人及びその他の民族がしたように（名譽欲の嫉妬からそれぞれの個々の国と国王の起源を古くする）彼ら（日本人）の隣人の中国人にひけは取れず、中国人に先

んじようとしたのだと思われる」と、旧約聖書の年代と合うと合わないとは別にして、日本人自身が考える起源についてある程度の正当性を認め、そしてその古さが成立した理由を推定し、「これによって彼ら（日本人）は充分に独り立ちした国家にしたと思ひこんでいる」と述べる。最後には、この君主（神武天皇）の時代以来、「日本人は自分の民族の行動や出来事を、誤りを犯すことなしに年表式に記述している」とし、そして神武天皇以来今上皇帝が統治する今まで、つまり天皇の統治は日本の暦で二三六〇年、ヨーロッパの暦で一七〇〇年続いていると論じる。ここで見逃せないことは、ケンペルが日本という国の文明を、決して頭から否定したりはせずに、その独自性を認めた発言を唱えていることである。

ケンペルは第五章でこれまでのヨーロッパ人の記述とは一線を画し、地理学的・言語学的な観点から、ヨーロッパ人として初めて日本人の起源を緻密に考察した。ところが、綿密な検証を行ったにもかかわらず、第六章ではその理論的な考察とは全く合致しない、日本人自身が考える起源について、特に一章を使って論じている。前章で詳細に論理を立てて検証したことに對して、ケンペルにとって理論的に全くかみ合わない「土着」の伝説的起源を収録した第六章が特に書かれたのは、日本国の文明に対する評価であり、ケンペルにはヨーロッパ以外の諸国に関して、ペルシャやシャムで「土着」の文物を記録しているように、日本という国の「土着」の歴史を重視して収録・記述しようとする意思があったと考えられる。繰り返して言えば、ケンペルは日

本の起源を考察し、そして世界における日本の位置付けを行ったのであり、日本の起源は日本「土着」の宗教である「神道」に関連することから、「固有」文化の重視という観点も併せて「神道」を重視して研究したのであるといえよう。

2 暦について

ケンペルが来日した頃のヨーロッパでは、まだ中国の暦とヨーロッパの暦との起源についての数字が合わないことに対する論争が始まったばかりで、日本はまだ視野に入っていなかった。ところで、中国の暦、年代記表はイエズス会によって作成された。最初に作成したのはクブレ (Philippe Couplet, 1622-1693) で、一六八三年のことであった。⁸⁰⁾ *Tabula chronologica monarchie Sinicae iuxta cyclos annorum LX. Ab anno ante Christum 2952 ad anno post Christum 1683* (『約六〇年周期の中国の君主の年代表、キリスト生誕前一九五二年からキリスト生誕後一六八三年まで』) という書名である。また、この時期には前述の「中国の哲学者孔子」およびマルティニ (Martino Martini, 1614-1661) の *Sinicae historiae: decas prima* (『中国の歴史：初めの十日間』) などの書物もヨーロッパで刊行された。⁸¹⁾ その後メンツェル (Christian Mentzel, 1622-1701) もまた一六九六年に *Kurtze chinesische Chronologia* (『短い中国の年代記』) を作成した。⁸²⁾ 中国での動きはこのような具合であった。

さて、ケンペルが作成した日本の暦 *‘Japonici Monarchae ac*

Imperatores. Ficti Veri” (≡手稿「日本の君主と皇帝、虚構の真実」)は、人的な情報および前述した「倭漢年表録」や特に「大日本王代記」を参照して作成されたと考えられる。ケンペルは同時代ヨーロッパ人の一般的概念、つまり旧約聖書の思想に基づいて、日本の起源はバビロンであると結論づけている。日本の暦を作成しようとしたことの理由の一つには、日本の独自性を重視する意識が存在したと考えられるのである。

そしてもう一つ理由がある。ケンペルは同時代にイエズス会によって作成された中国の年代記を明らかに意識しており、意図的に「中国とは違う国である日本」という考えの下に、暦を作成したと思われる。それはこの暦が左から順に“Jeto” “Mon. Jap.” “Mon. Sinc.” (≡干支日本の君主 中国の君主) そして“ante Christum” (≡紀元前) といったように各国の年代が並列して記載されていることから分かる。さらに暦が書き終えられた後に、“Ad Chronologiam Japonicam Spectantia” (≡日本の年代記についての考察) とラテン語で題された、清書された一群の文書が見られる。これはこの暦の前書きか後書きとして付け加えようとしたもので、ケンペルにはこの暦を出版する意図が明らかに存在していた。つまりヨーロッパと中国の暦の論争へ一つの貢献をなすことも、暦を作成した動機の一つだったのである。

3 日本神下し

ケンペルの手稿に、“Nipon Kami oroji. Mei Jio tukuji?” (≡日本神おろ

し、名所尽) と題された一群のメモ類がある。これは日本語の資料の言辞の音を、ケンペル風のローマ字表記で記録し、横にオランダ語な いしはドイツ語で文意の説明を付したものである。“Jomo Jomo uwijia mate moos” (≡そもそも敬って申す) から始まり、日本中の名所と神名が列挙されているが、起請文ではない。この底本は不明であるが、ケンペルがこの資料を神名帳として用いるために持ち帰ったことが推察され、少なくとも伊勢参宮を論じた「今日の日本」第三巻第四章の中の“Die erst Mia geku genandt hatt viele Canusj und 80 Massia [...] Die zweyte Mia [...] Naiku genandt, hatt 40 Massia” (≡外宮と名づけられた初めの宮には、八〇の末社がある。[...] 内宮と名づけられた二番目の宮には四〇の末社がある) という記述から、「神下し」の“[I]jewa Jimmēi Tenjo Daijin Gekkwōga Jiu masjia Nai quo ga fatji Jiu masjia” (≡伊勢は神明天照大神宮、外宮が四十末社、内宮が八十末社) が資料として使用されていることが認められる。膨大なケンペル資料の中で「仏教」・「儒教」資料でこのようにまとまった写しやメモは見られない。つまり「日本神下し」の写しを作成し、所有し、そしてそれを資料として使用するほどケンペルは「神道」記述に力を注いでいたのである。

おわりに

ケンペルが生誕してから三五〇年以上を経た現在、彼の手稿資料の解説が可能となるなど着実に研究が進展してきたにもかかわらず、ケ

ンペルの日本宗教記述については、ほとんど研究が進められてこなかった。

本稿ではケンペルの「神道」研究とその背景についての考察を行った。まず、ヨーロッパにおける日本宗教研究の進捗状況、バタヴィアでの知識人ネットワークの存在、ならびに『今日の日本』執筆時におけるケンペルの保有資料の状況を考慮し、ケンペルが学問的貢献という側面から、日本宗教の中で「神道」研究を選択したであろうことを指摘した。次にケンペルが、日本の起源と関連する日本固有の宗教として「神道」を重要視したことから、彼が「神道」研究に力を注いだことを明らかにした。

今後は、本研究を足がかりにして、さらなる情報源の解明、ならびにケンペルの「神道」記述の構成分析が俟たれる。

註

- (1) Kaempfer, Engelbert: *The History of Japan, giving an account of the antient and present state and government of that empire, of its temples, palaces, castles and other buildings, of its metals, minerals, trees, plants, animals, birds and fishes, of the chronology and succession of the emperors, ecclesiastical and secular, of the original descent, religions, customs, and manufactures of the natives, and of their trade and commerce with the Dutch and Chinese: together with a description of the kingdom of Siam.* translated by Scheuchzer, J. G., London, 1727.
- (2) ヨーロッパにおけるケンペル『日本誌』の受容、ならびにそれに基づいた日本観の形成については、Kapitza, Peter: *Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung.* Iudicium Verlag, München, 2001. に詳細に論じられている。

(3) 『日本誌』は従来主に英語版とドイツ版の二種類のテキストが扱われてきたが、両者は共に編者による加筆などがなされており、ケンペルの自筆原稿が正確には反映されていないので、本稿では原典批判版である Kaempfer, Engelbert: *Werk*, 1/1; 1/2 *Heutiges Japan* / hrsg. von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel, Iudicium Verlag, München, 2001. (以後 Michel/Terwiel (2001), 1/1, 1/2 と表記。) (＝手稿『今日の日本』) およびケンペルの手稿を用いて論じていく。

(4) 近年では、Muntschick, Wolfgang: *Engelbert Kaempfer als Erforscher der japanischen Pflanzenwelt.* In: D. Haberland (ed.), *Engelbert Kaempfer -Werk und Wirkung.* Franz Steiner, Stuttgart, 1993., Weger-Klein (1993), Kornicki (1993), Michel, Wolfgang: *Engelbert Kaempfers Beschäftigung mit der japanischen Sprache.* *Engelbert Kaempfer -Werk und Wirkung.* Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 1993. (以後 Michel (1993) と表記。) Muntschick, Wolfgang: *The Plants that Carry his Name: Kaempfer's Study of the Japanese Flora.* In: Bodart-Bailey, Beatrice / Massarella, Derek: *The Further Goal. Engelbert Kaempfer's Encounter with Tokugawa Japan.* Japan Library, Folkestone, 1995., Michel, Wolfgang: *On the Background of Engelbert Kaempfer's Studies of Japanese Herbs and Drugs.* In: *Journal of the Society of Medical History.* Vol. 48, No. 4, 2002. (以後 Michel (2002) と表記。) 中直一「ケンペル研究の現段階」『阪大比較文学』創刊号所収(大阪大学比較文学会、二〇〇三年)四五―六五頁などの研究がある。ケンペル研究の全体については、Hüls, Hans / Hoppe, Hans (Hrsg.): *Engelbert Kaempfer zum 330. Geburtstag. Gesammelte Beiträge zum Engelbert-Kaempfer-Forschung und zur Frühzeit der Asienforschung in Europa.* Hrsg. In Verbindung mit d. Engelbert-Kaempfer-Gesellschaft, Lemgo e.V., Deutsch-Japanischer Freundeskreis. Zusammengestellt und bearbeitet von Hans Hüls und Hans Hoppe. Wegner, Lemgo, 1982. (Lippische Studien Band. 9.), pp.215-258. Wolfgang Michel 研究代表「ケンペル著『日本誌』の原稿の解説、出版及びケンペル資料の総目録の作成に関する研究」(科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書(課題番号〇九六一〇四五九)(九州大学、福岡、二〇〇〇年)など

を参照。

(5) 「植物学」を通じて、初めてバタヴィアにおけるネットワークに言及したのは Weger-Klein, K. Elke: Engelbert Kaempfer, Botanist at the VOC. In: D. Haberland (ed.), *Engelbert Kaempfer - Werk und Wirkung*, Franz Steiner, Stuttgart, 1993. (以後 Weger-Klein (1993) と表記。) 及び Kornicki, P. F.: *European Japanology at the End of the Seventeenth Century*. In *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 56, 1993. (以後 Kornicki (1993) と表記。) も併せて参照。さらに体系的にケンベルの關係したバタヴィアのネットワークおよび出島における協力者を追求したものは Michel/Terwiel (2001), 112, pp.73~122.

(9) ケンベルの「神道」記述に関する研究としては、アストンの Aston, W. G.: *Kaempfer as an Authority on Shinto*. In: *Man*, Vol. 2, 1902. がある。これはケンベルの見た「神道」を分析しようとした論文ではなく、ケンベルの記述が事実と整合していることを非難することに終始した小論である。次にアントニの二論文 Antoni, Klaus: *Engelbert Kaempfers Werk als Quelle der Geschichte des edo-zeitlichen Shinto*. In: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, 161-162, Hamburg, 1997, "Die Tokugawa-Zeit verstand zu erben" - Zu den Ise-Wallfahrten der Edo-Zeit. In: *Wasser-Spuren*.

Festschrift für Wolfram Naumann zum 65. Geburtstag, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 1997. がある。(以後 Antoni (1997a, b) と表記。) 前者は「日本誌」第三卷一―四章に渡るケンベルの「神道」記述を分析し、その構成を浮き彫りにした労作である。これによってケンベルが「神道」記述の構成を意図的に行なったことが明確に分かるようになった。後者は第四章に絞って、ケンベルの記述の背景にある近世日本の伊勢参宮の様相をまじえて論じたものである。この二論文の功績は大きい。ケンベル自筆原稿に基づいた研究ではなく、ドーム版に基づいた研究であることと、手稿を用いなかったことに大きな課題が残った。

(7) Luis Frois (1532?-1597): *Historia de Iapam*. 書誌的な内容については、松田毅一「ルイス・フロイス著「日本史」の研究——初期五機内キリシタン史の研究史

料として——」、キリシタン文化研究会編「キリシタン研究」第五輯所収(吉川弘文館、東京、一九五九年)、Josef Wicki, S. J. 「はあでれルイス・フロイスの『日本史』(一五四九―一五九四年)」(「キリシタン研究」一六輯所収、一九七六年)を参照。

(8) João Rodriguez Tuzuzu (1561?-1633): *Historia da Igreja do Japão*. 書誌的な内容については、佐野泰彦、浜口乃二雄訳、江馬務注、土井忠生訳・注「ジョアン・ロドリゲス 日本教会史」上(大航海時代叢書第一期九卷)(岩波書店、東京、一九六七年)四四―五八頁を参照。(以後ロドリゲス(上)と表記。)

(9) *Society of Jesus: Vocabulario da Lingoa de Iapam*, Nagasaki, 1603., Supplemento 1604. (復刻版 解題亀井孝、勉誠社、東京、一九七三年)。(以後「VLI」と表記。)

(10) 採録基準は不明であるが、今泉によると神道語が一八五語で、「仏教」語彙はその六倍強の一―六九語であり、禅宗に関する用語が多い。「神道」語彙は「神主」など一般的な用語が多く、その教義や哲学的な部分にまで踏み込んだ語彙は見られないが、「仏教」語彙は、仏教の哲学的概念にまで踏み込んだ語彙も多く見られ、また、その用語はどの宗派で用いられているかまで記載されている。今泉忠義「日葡辞書の研究」(桜楓社、東京、一九七一年)五二七―五三九頁を参照。

(11) 本文は「Guedat. Liviar, ou libertar. Bup. O principal fentido he liberdade a cerca das paixões, etc. vicios. (＝解放すること。或いは自由にする)」。仏法語。主要な意味は、様々の情欲や邪悪に捕らわれぬ自由さということである。「VLI」, 25v. また、日本語訳については、土井忠夫、森田武、長南実編訳「邦訳日葡辞書」(岩波書店、東京、一九八〇年)を参照した。

(12) 「VLI」, 101r. 本文は「Fongacu. Bup. Ser, ou Julancia do primeiro principio, ou Fologue aies deje mlhar ar no corpo, etc. viver, etc. (＝本覚。仏法語。肉体と生命に交わり入る以前の本初存在。すなわち仏。)

(13) 井川義次「十七世紀イエズス会士の『易』解釈——『中国の哲学者孔子』の「謙」卦をめぐる有神論性の主張——」、『日本中国学会報』第四八集所収(日本

中国学会、東京、一九九六年)を参照。

- (14) 井川義次「ロングバルディとイントルチェッタ——中国哲学解釈をめぐる二つの道——」、『哲学・思想論叢』第一二号所収(筑波大学哲学・思想学会、茨城、一九九三年)を参照。

- (15) 日本語訳は、福島仁訳注「中国人の諸問題」訳注(上)、「名古屋大学文学部研究論集CⅢ哲学三四」所収(名古屋大学、愛知、一九八八年)、「中国人の諸問題」訳注(中)、「フェリス女学院大学紀要」第二四号所収(フェリス女学院大学、神奈川、一九八九年)、「中国人の諸問題」訳注(下)、「フェリス女学院大学文学部紀要」第二五号所収(一九九〇年)を参照した。(以後福島(a)(b)(c)と表記。) 底本はフランス語版テキスト、Niccolò Longobardo: *Traité sur quelques points de la Religion des Chinois*. (G. W. Leibnitz, L. Dutenus ed. Opera Omnia, Genève, 1768, Tom IV, pp. 89-144.) と、スペイン語版テキスト、*Respuesta breve, sobre las controversias de el XangTi, TienXin, y LingHoen, (esto es de el Rey de lo alto, espiritus, y alma racional, que pone el China) y otros nombres, y terminos Chinos, para determinarse, quales de ellos se pueden vsar en esta Christianidad, dirigida à los Padres de las residencias de China, para que le vean, y imbien despues su parecer al P. Visitador de Macao.* (D. Fr. Navarrete: *Tratados Historicos, Politicos, Ethicos, Y Religiosos De La Monarchia De China*, Madrid, 1676, pp. 246-289.)
- (16) 福島(a) 一八九、二〇四、二〇六頁。
- (17) 井川義次「イントルチェッタ」中国の哲学者孔子」に関する「考察」、『筑波中国文化論叢』第一二号所収(筑波大学中国文学研究室、茨城、一九九二年)二〇頁。(以後井川(一九九二)と表記。)
- (18) 翻訳はダ・コスタによる。現存する最古の「論語」の翻訳である。井川義次「十七世紀西洋人による『論語』理解」、『琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学』第八号所収(琉球大学、沖縄、二〇〇一年)八頁。(以後井川(二〇〇一)と表記。) また、これより以前にリッチ(Matteo Ricci, 1552-1610)による「論語」を含めた「四書」のヨーロッパ最初の翻訳があることされるが、現存していない。井川

(一九九二) 二二頁。井川(二〇〇一) 七頁。Walravens, Hartmut: *China illustrata*.

- Das europäische Chinaverständnis im Spiegel des 16. bis 18. Jahrhunderts*. Acta Humaniora, VCH, Weinheim, 1987, pp. 205-206. (以後 Walravens (1987) と表記。)
- (19) 井川(一九九二) 二二頁。Walravens (1987), pp. 205-206.
- (20) Prosper Intorcetta, Philippe Couplet et al: *Confucius Sinarum Philosophus*, Paris, 1687.
- (21) 井川(二〇〇一) 二二頁。
- (22) ケンベルの没後、ヨハン・ヘルマンがシュタイガター(Johann Georg Steigthal)とケンベルコレクションの売却の駆け引きを繰り広げたのだが、その際の売却リストに本書が掲載されている。大英図書館所蔵スローン文書4065, fol. 338r-339r. (以後スローン文書はSl.と表記。) なお、D. マサレラ「『日本誌』史」D. マサレラ、ポダルトベイリー、B. M. 中直一、小林小百合訳「遙かなる目的地 ケンベルと徳川日本の出会い」所収(大阪大学出版会、大阪、一九九九年)一六六〜一六七頁を参照。
- (23) 井川(二〇〇一) 八頁。
- (24) 井川(二〇〇一) 三四〜三五頁。また、ヨーロッパ人による中国哲学研究書の概観については Walravens (1987), pp. 204-211. を参照。
- (25) 前掲 Weger-Klein (1993) 参照。
- (26) Sl. 2910, fol. 293r-294r.
- (27) 前掲 Weger-Klein (1993), pp. 40-51.
- (28) Sl. 2910, fol. 294r.
- (29) 本稿第三章表二参照。
- (30) ヤーヘル覚書とケンベルの関係については Michel (2002), pp. 715-718. を参照。
- (31) Sl. 2910, fol. 293r.
- (32) Sl. 2910, fol. 293r.
- (33) "Sinto, das ist, der weg einheitscher gotzen" (= 神道) すなわち土着の神の

道) "Sinto, Sinsju oder Kami misji, das ist einheimischer Götzen Glaube" (「神道」神宗または神道^{Sinsju} すなわち土着の神像の信仰である) Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.173.

(24) Varenius, Bernhard: *Beschreibung des Japanischen Reiches*, (Der unveränderte Nachdruck der Ausgabe 1974), Iudicium Verlag, München, 2000. 参照。原本は *Descriptio Regni Japoniae. Beschreibung des Japanischen Reiches*, Amsterdam, 1649. 邦訳として、ベルンハルドウス・ヴァレニウス著、エルンスト・クリスティアン・フォルクマン独訳、マルティン・シュヴァイント、ホルスト・ハミツチュ編注、宮内芳明邦訳『日本伝聞記』(大明堂、東京、一九七五年)がある。

(35) ケンベルの「神道」記述が構成的に書かれていることを初めて論じたのは、前述したアントニの二論文である。前掲 Antoni (1997a, b) 参照。

(36) Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.173~206.

(37) 章名については、巻の最初に諸章の見出しをまとめて書き出しているものと、各章ごとの最初に書かれているものとは綴りに若干の相違が見られるが、本稿では後者の表記に従う。

(38) 日本固有としての1「神道」と、その他外来種の宗教で「神道」に取って代わろうとした2「仏教」、その後に入力した外来種の宗教3「儒教」、そして最後に輸入され現在は根絶されてしまった「キリシタン道」といったように、ケンベルは各宗教が日本に根付いた順を付け、その順番に従って記している。Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.173.

(39) ユーイン・ブラウン (Yu-Ying Brown) 「大英図書館所蔵ケンベル将来日本資料の意義」、国立民族学博物館、ドイツ日本研究所編「ケンベル展 ドイツ人の見た元禄時代」所収(国立民族学博物館、大阪、一九九一年)一〇四頁。(以後「ケンベル展」と表記。) また、大英図書館所蔵の和漢籍については、Kenneth B. Gardner 編『Descriptive catalogue of Japanese books in the British Library printed before 1700. 大英図書館蔵日本古版本目録』British Library and Tanni Central Library, London and Tanni, 1993. および川瀬一馬、岡崎久司編『和漢書総目録 大

英図書館所蔵『Catalogue of early Japanese books in the British Library』(講談社、東京、一九九六年)を参照。

(40) 但し便宜上、分類項目の①と②、⑧と⑨を合わせて一つにする。つまり七項目に分類する。

(41) ケンベルが持ち帰った書籍については、「ケンベル展」及び Michel / Terwiel (2001), 1/2, pp.143~169. を参照した。同書の該当箇所には、これらの書籍についての書誌的な情報も詳細に記載されているので、ここでは各書籍の書誌的な情報を特に示さない。

(42) 手稿『今日の日本』の第三巻第三章の、神道の礼日などについて述べた章でケンベルは情報源として *Sin dai ki* (神代紀) と明記している。Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.188.

(43) 安田十兵衛刊『大日本王代記』、貞享元年(1684)。刊行者の安田十兵衛は生没年未詳。日本の年号を記した書物で、天神七代、地神五代が記され、神武天皇即位以降、貞享元年に至るまで、各時代に起きた出来事を記した史書である。

(44) 梅村彌右衛門「倭漢年表録」、貞享四年(1687)。梅村弥右衛門は生没年未詳。上段に天神七代以来の日本の年号、下段に盤古氏以来の中国の年号を記し、各時代に起きた出来事を記した史書である。

(45) 刊年・著者名共に不明。「ケンベル展」によれば、刊行物が写本であるかも不明。内容は、五行、干支と共に皇極天皇即位の前年である六四一年から元禄までの年号一覧である。「ケンベル展」、p.147.

(46) 今村源右衛門については、今村明恒『蘭学の祖今村英生』(朝日新聞社、東京、一九四二年)、片桐一男『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生 外つ国の言葉をわがものとして』(丸善、東京、一九九五年)を参照。

(47) 情報源となったヨーロッパ人については前掲 Michel / Terwiel (2001), 1/2, pp.90~122. 参照。

(48) 情報源となった日本人については前掲 Michel / Terwiel (2001), 1/2, pp.73~89. 参照。

- (49) ミシェルは SI.3062. fol. 68v. に基づいて山伏の情報を提供した日本人を橋林鎮山であると指摘している。 Michel / Terwiel (2001), 1/2, p.470.
- (50) これについて Michel / Terwiel (2001), 1/2, pp.53~72. に詳細を述べられている。 Michel / Terwiel (2001), 1/2, p.53.
- (51) エンゲルベルト・ケンメル著、今井正翻訳『日本誌(上巻)——日本の歴史と紀行——』(龍ヶ関出版、東京、一九七三年)三六九~三七〇頁を参照。
- (52) SI. 3062. fol. 346v~349v.
- (53) ケンメルが日本の起源について論じた初めての著者ではない。但し、彼が日本の起源について初めて本格的に考察した人物であったと言える。 Michel / Terwiel (2001), 1/2, p.256. を参照。
- (54) Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.67~78.
- (55) Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.79~83.
- (56) "Unsere Land beschreibere haben dieser meinung platz gegeben: das die Japaner von den Sinesen entsprossen seyn" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.67.
- (57) Schurhammer, Georg: *SHIN-TO: The Way of the Gods in Japan*, Published by Kurt Schroeder, Bonn and Leipzig, 1923. p.126.
- (58) ロドリゲス(上) 三三三~三三三頁。
- (59) ロドリゲス(上) 一五八~一七六頁。
- (60) ロドリゲス(上) 一五八~一六一頁。
- (61) ロドリゲス(上) 一六一頁。
- (62) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第二巻(同朋舎出版、京都、一九九八年)一七二~一七三頁。
- (63) Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.67~68. リンスホーナンについて同書二五六頁を参照。
- (64) "Es ist ohn streitig, daß die Sprachen und derer Eigenschaften die gewißeste anweisungen thun, daß Ursprunges der Völker und Ursprünglicher Zusammenfügung einer Jeglichen nation; wie dan solches in den historien mangerley Völker, wan man dieselbe biß zu ihrer wurtzel nach siehet, befunden wird" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.68.
- (65) "Selbige Vermischung der Völker wird auch in anderen theilen der welt aus den sprachen erwiesen" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.68.
- (66) "Wan man die Japonische sprache durch alle worter und Eigenschaften nach rigeur einer Spanischen inquisition untersuchte, würde man sie von dergleichen Vermengung und Verwandtschaft mit benachbarten sprachen, woraus eine Abstammung der nation könnte gemunt mabet werden, frey und sauber befinden" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.69.
- (67) "Es stiet sich auch gegen den vermeinten Ursprung der idiotismus Japonischer sprache, und construction, welche sich gantz anders füget wie in der Sineschen" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.69.
- (68) ハンズ本の「諸國新編」に「日本」の語が用いられている。 Michel (1993)。
- (69) Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.70~71.
- (70) Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.71~77. 444' 445' の「我々の國」に「日本」の語が用いられている。 Michel / Terwiel (2001), 1/2, pp.266~267. に詳しい。
- (71) "wannen hero dan die Japaner nach ihrer wurtzel und ersten uhsprunge vor eine selbst ständige nation zu halten ist, welche ihr hehr kommens halber den Sinesen nicht zu danken haben" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.78.
- (72) "Die Japaner nehmen es gahr schimpfflich auf, wan man Ihren Ursprung aus dem Reiche und blute der Sinesen oder einiger fremden Völker ableiten will sondern wollen in ihrer eigenen kleinen welt entsprossen seyn" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.79.
- (73) Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.79~81.
- (74) "Biß hieher die theur und heilig gehaltene tradition der Japaner von dem Ursprung ihrer Nation. Es ist selbige von solcher Natur, das sie sich für einen gesunden Verstand niederlegt, und keiner wieder legung erwartet" Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.81.

- (75) “Es scheint, daß sie hiemit den Aegyptern, Chaldaern, Brachmanen und andern Völkern (: die aus ruhmstüchtiger accumulation. Jedes seine eigene nation und Könige alt gemacht :) nicht nach geben, ihren Nachbarn aber den Sinesen, es noch zu vor thun wollen” Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.82.
- (76) “Womit sie sich dan gnugsam zu einer independenten nation gemacht zu haben ver meinen” Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.82.
- (77) “Von der Zeit dieser Monarchen beschreiben die Japaner die thaten ihrer Völker mit einer ohn fehlahren Jahr rechnung” Michel / Terwiel (2001), 1/1, pp.82-83.
- (78) Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.83.
- (79) ヨーロッパの歴史観は旧約聖書に基づいた歴史観であった。アイルランド聖公会のアーマー(Armagh)の大主教であったアッシヤー(James Ussher, 1581-1656)は世界の始まりを紀元前四〇〇四年であると旧約聖書から算出した。その他の学者の説もアッシヤーとの誤差は二〇〇〇年以内である。岡崎勝世『聖書 V.S. 世界史』(講談社、東京、一九九六年)二二二頁を参照。また、これは当時のヨーロッパにおける世界の始まりについての一般的な概念であり、ケンペルも例外ではなかった。一方、中国や日本の起源は何百万年というとてもない単位で語られている。例えば、ケンペルが持ち帰った『大日本代記』では、「地神五代」のあとに、中国の「天皇氏」が位置付けられ、即位年が「寛文六年丙午のとし(一六六六)まで合式百卅万五千百四拾六年」成」と述べられていることから、地神五代の時代は、紀元前三〇三〇三〇年以前という途方もない数字になる。しかも世界の始まりはさらにそれ以前である。同様に『和漢年表録』においても、「天照大神」は「在位二十五萬年」、「天皇氏」は「一萬八百歳」などと述べられている。それぞれ『大日本代記』二丁目、「和漢年表録」一〜二丁目より。
- (80) Walravens (1987), p.176.
- (81) Michel / Terwiel (2001), 1/2, p.146.
- (82) *Sinice historiae: decas prima. München, 1658.*
- (83) Michel / Terwiel (2001), 1/2, p.146.

- (84) Walravens (1987), pp.176-178.
- (85) Sl. 3061. fol. 24r-43r.
- (86) Sl. 3061. fol. 26r. 52vに見られる。
- (87) Sl. 3061. fol. 43v-45v. また 43v の左下部には日本で作成した「堅不留」(ケンブル)とふう印が見える。
- (88) Sl. 3061. fol. 252r-255r.
- (89) Sl. 3061. fol. 252r.
- (90) Michel / Terwiel (2001), 1/1, p.193.
- (91) Sl. 3061. fol. 252r.

【付記】

本稿は、二〇〇四年五月一六〜一九日にかけて北京で開催された、中国科学院自然科学史研究所主催国際シンポジウム Symposium on the Interaction between Science, History and Culture in Germany において発表した Engelbert Kaempfer's Study of Shintoism and Its Background (五月一八日英語発表、英語原稿「ノンペーパー版」二一〜二四頁)、ならびに関東近世史研究会月例会(二〇〇四年六月二六日)において報告した「ケンペル資料に見られる「神道」研究について」の両発表原稿に基づいて、加筆・増補してなされたものである。なお、成稿に至るまで、九州大学大学院言語文化研究院ヴォルフガング・ミヒェル教授、ならびに九州大学大学院比較社会文化研究院吉田昌彦教授に数多くのご指導とご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

(〒八二〇〇三五 福岡市中央区梅光園二一七―三
ロイヤルコンフォートロコ六本松一〇三号)